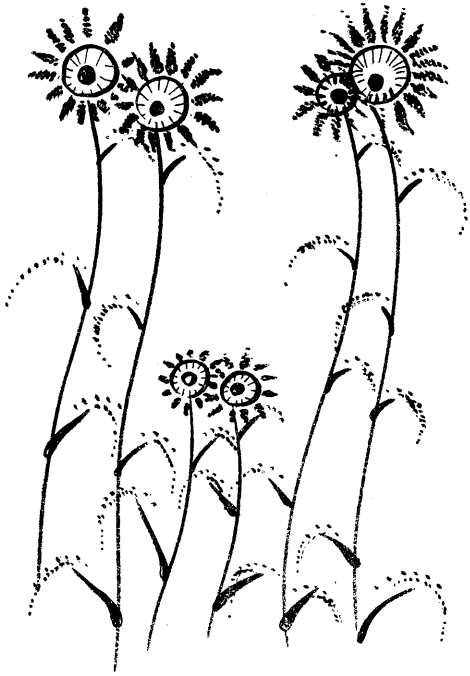
若いお母さんたちへ

——デンバー生活の体験より——

はるにれの会

塚田幸子



このシリーズも始まってからちょうど一年となり、同じ季節に再び私の番が回ってきました。一年というサイクルは、この数年、私にとって意味深いものになり、様々な思いが季節毎に心をよぎります。帰国二年以上を経た今、三年間アメリカ、デンバーで生活したことが、よ

うやく語られてもよいこととして自らに感じられ始めたところです。

帰国時に幼稚園年長であった次女も、この四月から三年生、長女は中学二年ですから、幼稚園児を第一子として持つ若いお母さんたちには、今の私の状態は、子どもの手が離れてうらやましいと映るでしょうか。正直に言って、次女を背負って、長女を幼稚園に送り迎えしていた頃の自分は、自分だけの自由な時を欲してやまないことが少なからずありました。そういう時代を過ぎてきて思うことはそんな思いを母親らしくないとして批難するのでなく、その思いにはけ口を与えたいということです。

つい最近耳にしたことですが、乳児を連れてテニスをしていた母親が「何もあんなに小さい赤ん坊を連れてまでテニスをしなくても、ちょっと待てば子どもは大きくなるのにね」というようなことを聞こえよがしに言われたという話。そのちょっとが待てないように感じられるのだと言う別の母親。たいていのお母さんはこんな話を耳にしたり、自分が体験したりしているのではないでしょうか。ここで、言われた母親の側に問題がないわけではないとしても、いやみを言ったのが、あまり年齢の違わない、母親としてはほんの少し先輩であるに過ぎない人たちである点が、私には残念で悲しいことに思えるのです。恐らくそう言った人たちも、過去には逆にそんないや味のひとつやふたつ言われた経験を持っていることでしょう。自分が言われたこと、されたことの仕返しという意識では、進歩がありません。また、テニスが遊びであり、ぜいたくな事だからと言うのであっても、母親がほんのひと時、精神的、肉体的に開放された時を持って、日々の子育てや家事に再び励むことができるというのであれば、批難されるより奨励されてもおかしくはありません。

例えとしてはテニスに限らず、パチンコであっても、読書であってもよいので、何でもよいわけですが、言われる側の考えるべきことは、子どもにとってよりよい状況をということでしょう。いやみを言った人から見れば

子どもが危険な目にあいはしないかという心配で、むしろ親切心のつもりかもしれません。せめて、赤ちゃんをその間誰かに預かってもらうことはできなかったのでしょうか。

アメリカにいる間は、私も、最初は恐る恐るでしたが、夫婦同伴のパーティー等で、子どもを日本人の知人やデイケアセンターに預けましたが、幸い、電話一本で見ず知らずのベビーシッターに預けるという事はせずにすみました。そうせざるを得なかった人もいるのです。というのも、後になってわかった事ですが、夫婦同伴と言ってもパーティーの性格によっては、子どもを連れて行ってよいかどうか主催者側に尋ねることもできますし、生まれたばかりでまだ母乳で育てているような場合、その旨を申し出て、欠席させてもらうこともあるということで、是が非でも夫婦で出席しなければならないなどと考えることはないと言うのです。アメリカ人にそう言われて、その時私は、異国でその地の習慣に過剰適応していた自分の気負いというものに気づかれ、ハッとしたのでした。

遊び事の時間の為に子どもを預けるという後めたさを捨て、同じ小さい子どもを持つ母親同士が、互いに子どもを預けたり預かったりできる人間関係の輪を作る努力をもっともっとしてほしいと私は思うのです。

私の場合、子どもを預かってもらう機会がアメリカにいた頃は大変多かったわけですが、それと同じくらいに、よそのお子さんを預かる機会も数多くありました。その中では日本人同士の預け合いが多く、金銭のやり取りは大変少ないものでした。基本的には、一度預かってもらったら、一度お預かりして帳消しにするという考え方で、一時間いくらという相場は知らなくてもすむのでした。

ところがある日本人の母親は、一方的に預ける機会が多いからと、厳密に支払っていくのです。子どもを預ける時にも、おむつや着替え、おもちゃ等はきちんと用意し、説明して置いて行くのですが、肝心の子どもには「いい子にしてるのよ」と厳しく言って出て行ってしま

うので、置いて行かれた子どもは、母親の後を追って泣き、私が近寄って話しかけたところで靴さえも脱ごうとはしません。コートも着たまま戸口の所で泣いています。無理矢理靴やコートを脱がせる気も私には起こらないので「お母さんはしばらく遊んでいれば帰ってくるわよ」などと声をかけながら、見守る態勢です。幸い、当時、次女のNはまだ三歳になったばかりで家にいましたから、一緒に遊べるお友だちが来てくれたことをよろこんで、おもちゃを差し出したり、声をかけたりいろいろと動いてくれるので、大きい私が直接出しゃばるより早く、子どもは不満ながらも遊び始め、しまいには自分で靴もコートも脱ぎ捨てて、私にさえも近寄って要求を伝えにくるのです。

この母親は、その頃私が運転免許もなく車もなくて自由に外出することができないのを幸いに、安くて質の良い、しかも日本人のベビーシッターを手に入れたとばかりに、実に頻繁に子どもを預けて行ったものです。けれどこの人は、私個人とは良好な関係を作り上げようという努力はせず、最後までベビーシッターとしてしか見てくれませんでした。(私がベビーシッターという看板を掲げた訳ではありませんが)。時によっては行き先も告げずに出かけて行くのでした。私自身は、自分の子どもを預けるのなら、預かり手に対して信頼や好感の持てることを期待するので、この母親が私自身には好意どころか敵意をすら見せることが不可解でした。

また、帰国も間近となり、引越しの荷物を作り終えた頃のこと、お隣りのカナダ人が、熱のある子どもを預かってほしいと困惑した表情で頼みに来たことがありました。私共の住んでいた家は、ユダヤ人の経営していた大きなコンプレックスの中のタウンハウス(連棟式の家)でお隣りと言っても壁一枚隔てただけで、裏庭に出ればすぐに姿を見ることのできるつながりです。うちの二人の娘たちとお隣りの五人の娘たちの内の上二人とはしょっちゅう行ったり来たりして遊んでいる間柄になっていました。生まれたての赤ちゃんを含めて小さい子どもを五人も連れて買い物に行くのはどう見てもたやすいこと

ではないので、私が預かってあげるということもそれまでに何度かあり、母親同士は互いの料理をおすそ分けしたり、作り方を教え合ったり、材料が足りない時に貸し借りするというほどのつき合いにもなっていました。そんなわけで、ほんの一、二時間、居間のソファーに寝かせておいてほしいと言われた私は、まだ二歳の娘Lを預かったのです。お隣の家は、モルモン教徒で、その集まりに出かける所だったのですが、ご主人がどうしても奥さんに顔を出してほしいと言うのだとすまなそうに言うのですから。それはもう外が真暗になって夕食後のことで、うちでも夫が帰ってきていましたから、私は、夫に、「預かってもいいわね」と断わりを入れたのはもちろんです。結果は「何も恐ろしい事態に至らず」も、順調に回復したのでした。

面白いことに、このお隣りの奥さんは、私に、一度もベビーシッターの代金などと言って、現金を差し出すようなことはしませんでした。けれど、お金に換えられない親切を私は沢山受け取っていたのです。このカナダ人の

一家がモルモン教の信者で、古き良き時代の隣人愛を今もそのままに生きている人たちだからなのでしょうか。同じ日本人から、ここはアメリカだから、アメリカ流のビジネスライクなやり方でいきましょうとお金を差し出された時、私の心に冷たい風が吹きぬけていきました。

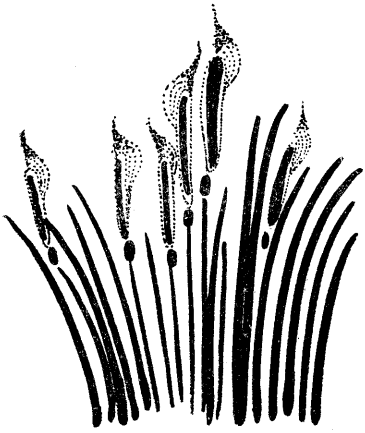
とは言え一方で、お金を払って子どもを預かってもらうということは、大変便利なことではあります。日本でも保育所があり、一時はベビーホテルのあり方が問われたこともありました。最近では、アメリカ同様、相当高額を支払っても優秀なベテランのベビーシッターを頼んでくるお客が増えているということで、ベビーシッター派遣業なども立派な成長産業になるという時代です。

保育所は日本では公立のものが数多くあって、私立は少ないのが現状ですが、アメリカでは、少なくとも私の見た限りでは公立の保育所というものはなく、すべて私立のようでした。古くからは教会の附属としてあるもの、新しいのは、全米にチェーン展開して躍進中のものがあり、私が次女を幼稚園のプログラムに預けた所も、そんなチェーン保育所のひとつでした。次女の幼稚園捜しの話は以前に書きましたのでここでは詳細は述べませんが、あちこち捜し歩いて、当の次女Nがいちばん気に人った所が、たまたま、このチェーン保育所の類のひとつであったわけです。

アメリカ生活で隣人に恵まれたのと同様、私は、Nの幼稚園の先生にも大変恵まれて、Nばかりでなく、私自身が大いに得る所があったと感謝しています。というのもその先生は、私がNを送り迎えに行く度に必らず向こうからも声をかけてくれて、その日のNの様子をいろいろと話してくれたからなのです。日本語でならもっと自由に自分の気持ちを言い表わせる私も、英語でとなると必要最少限のことを伝えるのにも四苦八苦していて、たいていのアメリカ人は私の話を聞いてくれるほど辛棒強くもおせっかいでもなく暇でもないようでしたから、おしゃべりのできない不満はたまる一方だったのです。このE先生は両親がドイツからの移民で、戦争中敵国人扱いされるのを恐れて一切ドイツ語を話さなくなり、母国

語を失ってしまったことを今になって悲しんでいるという生い立ちから、自分の五人の子どもたちのことまで、毎日の送り迎えの折りに少しずつ語ってくれました。今では五人の子どももすべて成人し、それぞれに家庭を持って、夫婦二人の生活なので、働きに出る経済的な理由はないものの、半ばボランティアの気持ちで、自分の家のすぐ近くにあるそのデイケアセンター（保育所）に務めているのです。

彼女は、私にとって理想的な保母さんでした。朝Nを送って行けば必らず私に声をかけてくれましたし、昼に迎えに行けば、その日の保育でNがどんな様子だったかをこちらから尋ねない内に語ってくれて、私には保育所でのNの成長ぶりが目に見えるようでした。全く言葉のわからなかったNが、言われたことを理解するようになったことや、初めて自分の口から英語を話し出すとそのスピードの速かったことなど、みんなE先生が教えてくれたのです。こうしてNの送り迎えは私の毎日の楽しみのひとつになっていき、E先生がお休みの日というと、



Nではなく母親の私の方がひどくがっかりしたものです。二年間、保育所を変えることなく続けた上、夏休みにも通い続けたのは、そこにE先生がいたからなのです。度々、子どもたちが入れ替わり、グループが変わり、他の保母さんや保父さんが次々と短期間でやめては変わっていくのに、Nを介して、E先生と私の絆は深まっていき、一年もすると、整地の段階からすべてを二組の夫婦で助け合って手作りしたというE先生の山小屋に招待され、晩秋の週末を過ごしたのでした。

E先生とは本当にいろいろな話をしました。ほとんどは彼女の方が次々に話すことで、私は思っていることの半分も言えないのでしたが、彼女の話は首肯くだけですむほど、私の考えと一致しているか、あるいは私にとって興味深いものばかりでした。夏休みの旅行の話から、私たち夫婦は山が好きで、夫は昔から丸太小屋を作りたかったのだという話をしたところ、E先生は自分たちの山小屋に来てみないかと言うのです。私は、もちろん、このような誘いを受けるなどあまりにうれしくて信じてよいとは思えませんでした。あまりいい話は、うっかりその気になって後でダメになった時の落胆が大きいので、私はできるだけ社交辞令程度に受けとめようと努力していたのですが、期待は裏切られず、二、三か月後に話は実現の運びとなったのです。後になってE先生が私に言うことには、彼女の方も水洗トイレもなくお湯も出ない山小屋に私たちが本当に泊まりに来てくれるかどうかとても心配だったというのです。実際、その山小屋は、デンバー市内に住めば当り前のセントラルヒーティングなどなく、薪のストーヴで暖を取り、ジャンクヤードでただ同然に手に入れた旧式の薪でたく料理用ストーヴで料理をしたりお湯をわかしたりというやり方で、私たちには感激的なものでした。博物館ではなく実際に使われるこの小屋は、何もかも開拓時代そのままを生きられているのです。正式な州として合衆国に加えられたのがせいぜい百余年前というコロラドでは、歴史と言っても本当に百年ほど前までしかないのですから、子どもの頃、映画やテレビで見た西部劇のシーンが眼の前にくり

広げられていくようで、眼を見開きっ放しだったのです。

小屋のまわりはアスペンの黄葉のまっ盛りで、金色に輝いてクルクルとまわるその愛らしい葉の下で、岩の上に腰をおろした私たちは、長い時間、本当に楽しい語らいをしました。降り注ぐ陽の光は暖かいというより暑いくらいに空は深い青に澄みわたっていました。

E先生は、Nの送り迎えの折りにも少しずつ話してくれた保育所経営の実体を私にこと細かに語るのでしたが、次々とよい保母さんたちがやめていくのは、給料があまりにも安すぎるからだと憤がいしていました。E先生自身はお金が欲しくて働いている訳ではないので続けているけれども、その保育所ではすでに最古参になってしまったと言います。続いている人たちというのは他にもいるけれど、彼女らも生活には困らない人たちで、その仕事が好きだからやっているというのです。E先生よりさらに年上のおばあさん先生、幼稚園プログラムを担当していた厳しいけれど若くてかわいらしい先生、この三人ぐらいしか、私とNの通った二年間を通じて残った先生はいませんでした。アメリカで保育所のチェーン展開が成功しているように見えた陰にこんな実体があるのです。

舌足らずになりましたが、また筆を取る機会があればと願いつつ稿を閉じることにします。